「活動の概要と研究成果」

NO.J2419

活動題目：タイ南部のイスラーム社会におけるロヒンギャ難民との共存のあり方

所属：大阪大学大学院国際公共政策研究科　博士後期課程

氏名：Pratippornkul Ruengrin プラティッポーンクン　ルアンリン

本報告書では、タイに亡命したロヒンギャ人を対象にして、現地の社会にどう溶け込んでいるか、同じロヒンギャ人コミュニティとの関わりの実態がどうなっているかを明らかにした。特に、ムスリム多数のタイ深南部での受け入れ状況の違いや、宗教がロヒンギャの定住に与える影響を明らかにすることを目的とした。文献調査に加え、2024年8月から2025年3月にかけてタイおよび日本で現地調査を行った。例えば、ベーラ氏は16歳の頃から亡命し、マレーシアに避難していたが、不法移民としてはタイの方が規制がやさしく、暮らしやすいのではと感じ、知り合いのいるタイのパッタニ県に辿り着いた。現在は現場作業員であり現地の女性と結婚し、タイの無国籍者の在留カードが得られるように村人たちが助け合っていた。在留許可書を持っていない人は海辺に住み、仕事は漁師で、何ヶ月かに一度だけ帰ってくるようだった。理由は逮捕される機会が減るからである。ロヒンギャ人のコミュニティはあるが、外ですれ違ったときは知らないふりをし繋がりがあるとバレないようにしている。また、ベーマ氏は25歳で避難し、現在は布の訪問販売の仕事をしながら、同じロヒンギャ人の奥さんと弟と暮らしている。分割払いで契約書を作らない売り方が、低収入の村人にとっては買いやすく、払えないときでも怒らない性格が好まれている。子どもは在留カードを持っていないが、現地の村人には親しまれており、小学校の校長先生は在籍を認めてくれている。同業のロヒンギャ人とは競争にならないよう、売る物を変え、訪問の日時もずらしている。このように、深南部では漁師として家にいない時間が長く、現場の仕事でもミャンマー人がいない場所があり、逮捕の可能性が高い街中にいなくても、農村で物売りとして働け、食べ物もハラールで、村人とも親しくなりやすい点が、ロヒンギャ難民にとって暮らしやすい要因となっているのではないか。